

524
389

トツレフンパ社信通演講藝學

題話の日今

觀樂觀悲の化文活生

演講氏儀林田池

1926 NO. 12

日本の文明批評家に対する私達の、最大不満は、其批評の公平を期せんが爲に、餘りに不徹底に墮した事です。否公平とは不徹底の別名の如きものでした。不徹底は意志と熱情の薄弱を意味します。私は今池田林儀氏のこの一編を一讀して、私達の要求するほんごうの公平と、人類の未來につながる、意慾と熱情に心からの敬意を拂ふと共に、始めて救はれた様な氣持がしました。

氏は現代の社會相に公正なる批判を持つと共に、熱烈なる改造の要求に燃ゆる方です。高貴にして眞實なる人類の文化は、悲觀樂觀を超越したる希望と努力に生きる人々のみに創造されると説かる、氏の御意見には、若き日本の創造力である私達こそ是非とも聽かればならぬ眞理があります。

會員諸兄の御愛讀を乞ふと共に、御忙がしい時間を本講演に御割き下さつた、池田先生に、編者は深謝するものであります。



始





池田 林儀 氏

學藝講演通信の使命——あらゆる文化を、一部の人に専有させずに、広く一般國民に普及する事が、私達の年來の運動であります。

如何なる階級の人々たるを問はず、都市と山間僻地の區別なく、少々の費用と、少々の時間で、文化の中心地に於ける名士の學藝講演を、居ながらに聞く事が出来、然もそれが永久的に印象せられ、保存せらるゝと云ふのがこの講演通信の使命であります。

平易にして理解され易く、特殊の課目に偏せず、政治、經濟、哲學、宗教、教育、藝術、等あらゆる部門を網羅して、然もこれを説く人が、一部の人に限らず、英米獨佛は勿論、世界各國から來遊する、名士講演と、日本に於けるあらゆる名士の講演を、最も敏活正確に報道するもの、本講演の外に有ませぬ冀はくば大方の士が、この趣旨に御賛同下さつて、御入會あらん事を伏して御願ひ申上ます。

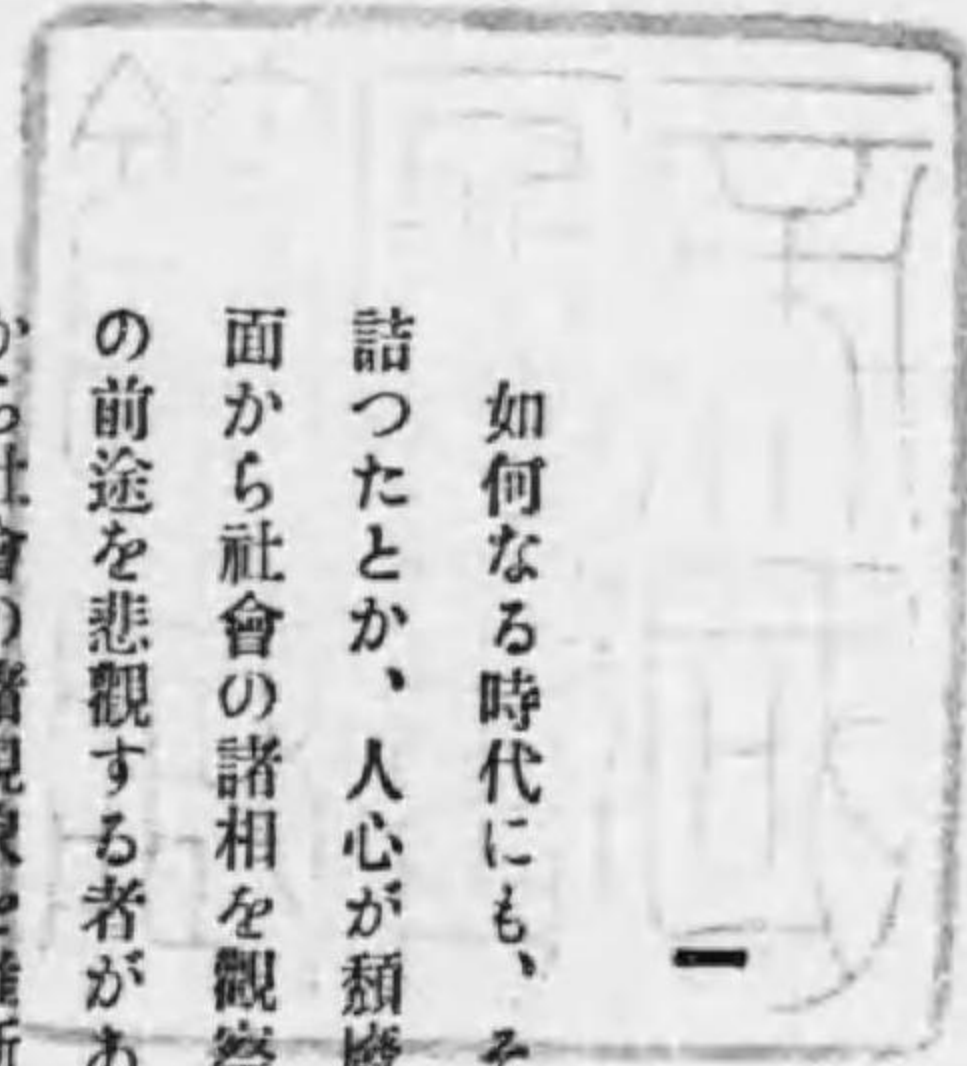
編者 白

生活文化の悲觀樂觀

池田 林 儀

如何なる時代にも、その時代の世相を通観して、慨世憂國の悲憤の情を吐露する者があるものである。時代が正行きか行きか、人心が頹廢したとか、風俗が紊れたとか、人倫道德が地に墮ちたとか、政治が墮落したとか、失な面から社會の諸相を觀察して、このまゝで推移して行くに於ては、國家社會の滅亡近きありと云ふ風に考へ、人方の前途を悲觀する者がある。斯う云ふ悲觀的な見方をする人々は、世間の噂さとか、新聞の記事とか、さう云ふものから社會の諸現象を推斷することが多い。強姦、殺人、強盜、詐欺、姦通、三角關係、收賄、横領、瀆職、機密費濫用等々、目に餘る日常の惡事非行を數へたてゝは、これ社會人類の墮落にあらずして何ぞ、と云つた風に、或は慨し、或は悲しむのである。

斯く社會人類の缺點や暗い影ばかりを窺つて見ると、如何にも社會人類の前途は暗澹たるもので、悲觀的な教育者や宗教家や道德家や經世家などが、聲を漏らし血眼になつて悲憤慷慨するのも、無理がないと云ふやうにも考へられる。そして、現代人が自ら稱して文明を矜り、文化を享樂せんとしつゝあることの、如何にも無意義であるかの如く



正行き
6. 2
15. 内交

524-389

にも見えるのである。そして、文化の向上を高調しつゝある現代人の生活なるものが、果して向上しつゝあるのか、廢退しつゝあるのかといふことに就いて疑念が挾まれるのである。

けれども、一方には、右の如き悲觀論者に全然反對して、人類生活なるものを頭から樂觀的に見てゐる人々もある。そして、我々の生活、われわれの文化は、日一日と向上進歩しつゝあるのであつて、決して墮落も廢退もしてゐない。新聞紙などを通じて見る、社會の種々なる思はしき相は、これは文化の向上に伴つて起つて來てゐる例外的な、極めて小さな缺點であつて、惡事非行がより多く起りつゝあつても、社會全體としてはよりよき方向に進みつゝあるものであると見做すのである。

此の悲觀論者の見方にも多少の眞理があり、樂觀論者の見方にも多少の眞理がある。故にその何れに與すべきであるかと云ふことは、今こゝにこれを斷じ去る譯には行かない。けれども、此の二つの極端なる社會觀世相觀に對する時に、われ等はそこに或る一つの大きな暗示を受けるのである。それは、われわれ人類が、常により善く、より高く、より進んだ文化の生活を享樂せんと切なる望みに生きつゝあるものであるといふことである。悲觀論者も、樂觀論者も、要するに生活文化の永遠的なる向上發展を希ひつゝあるのである。

それならば、現在の社會は、果して如何なる状態にあり、如何なる程度の文化の地位に居るものであらうか。毎日の新聞などを通じて見た社會は、如何にも墮落した腐廢し切つたものゝ如くにも思はれる。たゞ現在に於て現實の生活現象、社會現象、文化現象のみを見る時は、この局部的なる、現實的なる、社會人類の缺點に對して悲觀せざるを得ないことも多々あるのであるが、たゞそれだけでは、未だ以て正鵠なる社會觀察上の判斷となすことは出來ないのである。われ等の社會觀察は、今少しく觀照の立場を變へなければならぬ。人類の生活現象は、決して單なる現實

相のみではないのである。われ等の今日享樂しつゝある生活そのものは、實に過去に連なると同時に、未來にも連なつてゐるものである。生活現象は生長發展の現象である。亡び行くが如くに見えて、永遠に甦生しつゝあるものである。故に文化の消長は、過去と現在との凝視によつて判ぜられ、未來の創造に於て比較の公正が期せられるものである。

二

われ等は遠く過去を顧みて、印度や支那の文明の消長を考へることが出来る。バビロンや、エジプトの文明の衰亡を憶ふことも出来る。ギリシャ、ローマの文明の興廢を追懷することも出来る。なるほど文明が行き詰つて、そこに没落と亡滅とを見た。けれども、人類はこれが爲めに亡滅はしないのである。過てる文明生活を享樂したものは、民族的に亡滅し去つたものはある。けれども、民族的生命の永存しつゝあるものは、その間に文明の興亡の波紋を止めてはゐるが、現に人類文化の進展のために努力しつゝある。過去の文明は亡びても、新らしき文明が創造されつゝある。文明の亡滅は文明そのものゝ缺陷であつて、人類そのものゝ缺陷ではない。文明の行き詰りは、文明そのものゝ弱點の暴露であつて、人類そのものゝ弱點の暴露ではない。人類は缺陷ある文明を捨て、更らによりよき文明を創造することが出来るのである。人類は不斷の創造を期して休まないものである。われ等は、この事實を一國の上に、一民族の上に、乃至は人類全體の上に見ることが出来る。

藤氏亡びて平氏起り、平氏倒れて源氏榮え、北條足利を経て、織田豊臣の時代に遷り、徳川氏三百年の治世も行き詰つて明治維新となつた。その間に於ける日本民族の文化の興亡消長は、顧みて感無量なるものがある。舊時代が亡びて新時代起り、新時代が行き詰つて、次の時代が展開する。民族の興亡を見れば局部的にはなるほど、次から次へと滅亡の跡を止めてゐる。しかし、これを日本民族全體の上から見れば、日本民族の文化は決して廢退の跡を印してゐるものとは云はれない。經濟的にも、社會的にも、肉體的にも、政治的にも、道德的にも、理知的にも、日本民族は不斷の進歩發展を遂げて今日に及んで來たのである。

社會學者や、文學者や、宗教家や、教育家や、政治家や、色々な人たちが吾々の衰微廢頹墮落を擧げて、前途の甚だ悲觀すべきことを訴えるものもあるけれども、それは、過去の文化を享樂しつゝあるものゝ衰亡そのものを悲しむの聲である。民族は不斷の文化の創造に向つて努力しつゝあるものである。新文化の創造は、常に新人の業である。過去の文化の廢頹墮落を慨くのは、過去の人である。舊き人である。過去の文化の衰亡は、やがて新文化の發生であらねばならぬ。この意味に於て、われ等の社會觀察は、永久不斷の文化の創造を第一義諦としての、民族生活そのものに立脚點をおかなければならない。これを要するに、世の多くの人々は、餘りに現實世界のみを眺めて、歴史的なる人類の生活現象を見ず、又、未來に連なる不斷の創造力を度外視してゐるといふことが解るのである。

われ等の生活は、われ等の文化は、決して、現在的なる觀察のみを以て、これを悲觀したり樂觀したり、即斷すべきものではない。宜しく、これを觀察するに方りては、小にしては民族的に、大にしては、人類全體として、その過去現在未來を考察して、その上にはじめて悲觀樂觀の立場を定めることが出来る。然らざる限りは、その觀察には最初から大なる缺點が含まれてゐるものであるといふことを知らなければならぬ。

三

現在に於て、現實の社會現象を靜視する時は、外面的に、如何にも慨くべく憂ふべき幾多の事相を見ることが出来る。そして、現代人の墮落といつたやうなことも訴えることが出来る。けれども、吾等は、現在の文化の程度そのものに對して反省して見る必要がある。又、現在、今日行はれてゐる幾多の、非事非行に對しての、比較研究の立場に立つて見る必要もある。統計上から見れば、犯罪の数が殖えてゐるといふけれど、一面には、人口も増加してゐるといふことを知らなければならぬ。一八〇五年代のロンドンには、約二萬五千人の淫賣婦があつたと云はれてゐるが、一九二五年のロンドンには、約二萬人しかないといふことである。これを對比して見る時に、ロンドンに於ては二二〇年間に、淫賣婦の数が五千人しか減じてゐないのであるが、これをロンドンの人口の數字に比較して見る時には、そこに驚くべき差異を發見するのである。即ち、一八〇五年のロンドンの人口は、僅かに百萬人に過ぎなかつたが、一九二五年のロンドンは八百萬人と言はれてゐるのである。このことを考へる時には、今日のロンドンに於ては、淫賣婦の数が非常なる減少を示してゐることを如實に知ることが出来るのである。故に、今日ロンドンの中央を淫賣婦が濶歩してゐるからとて、必らずしも、直ちに之を以てロンドンの墮落を難するわけには行かないのである。

現代を批評するには、どうしても過去と比較して見る必要がある。舊時代の人々は、よく新時代の人々の輕兆浮薄を難じて、過去の人々の堅實であつたことを説くけれども、それが果して如何の程度のものであるかは問題である。斯く云ふ自分も、學生時代に於て、よく諸先輩からその少年時代、青年時代の苦學健闘の物語を聞かされて、われ／＼の幸福なる書生々活を羨まされると同時に、われ／＼の輕兆浮薄を叱られたものであるが、その叱られたわれ／＼から見ると、今日の少年青年なるものが、非常に幸福な生活をなしており、又、極めて輕兆浮薄にも見えるのである。同じ語學を學ぶにも、われ／＼の先輩は字引すら持たなかつたが、われ／＼はその字引なるものを持つことが出来た。

けれども、今日の學生諸君は、遙かによき教科書、遙かによき字引、遙かによき教師を持つてゐるのである。しかも、成績は餘り變らないのであるから、先輩から叱られるのも無理がない。しかし、これは必らずしも、現代の少年青年の輕薄のみを難することは出来ない。そこには、時代の意義が伴つてゐることを知らなければならぬ。

輕兆浮薄になつた、墮落した、などといつては居るけれども、これを社會全體の上から見ると、社會は進歩發達を遂げつゝあるものであることを知らねばならぬ。假りに六十年前の日本と、今日の日本とを比較して見る時に、そこに驚ろくべき向上發達を遂げてゐる事實を發見するのである。これを一つの都會生活について見ても、瓦斯、電氣、水道、電車、市場、浴場、博物館、圖書館、公會堂、消防署、警察署、官廳、學校、道路、公園、郵便局、下水、兵營、劇場、料理店、工場、など數へ來れば、殆んど無限といつてもいゝ位に、過去と今日とは全く面目を異にしてゐるのである。而して、これ等のために投ぜられてゐる資本の額なるものも、これを一國の富といふ點から考へて、六十年前と今日とは、非常なる増加を來してゐることを知るのである。斯うした外的な、物質的な方面からのみ見ても、六十年前の文化と、今日の文化との間には、驚異すべき進歩發達の跡を見るのである。社會がだん／＼墮落して行くと嘆ぜられながらも、社會民衆總體の上から、大局的にこれを見れば、事實に於て進歩向上しつゝあることを知るのである。これわれ／＼の社會觀察の上に於て、一考を値する問題ではあるまいか。

四

われ／＼の觀察を、今少しく確實にするために、過去六十年前における社會生活と、今日における社會生活を比較して見ることも、決して無駄なことではあるまいと思ふ。この比較は必らずしも、具體的な數字的な比較を必要と

するのではなく、極めて常識的な卑近な例證を以てしても十分納得が出来ることであらうと思ふ。

六十年前と今日とでは、國民的の富の程度が非常に異つてゐる。國家がこれまで經營した幾多の事業に投ぜられた資本も、これを總計して見ると極めて大なる額に上るであらう。鐵道や橋梁や道路に投ぜられた金は、一見消え失せた金のやうにも見えるが、實はこれが國家の財産として、富として遺りつゝあるのである。その他都市町村に於ける建築物、工場、會社等の諸設備、これ等が含み有つてゐる富の程度は、六十年前と今日とでは、非常なる差異がある。それから、國民の収入の點から考へて見ても、六十年前と今日とでは著しい差があるのである。なるほど、合理的に推論すれば、六十年前の十圓と今日の百圓とが相匹敵することになるかも知れぬ。然しながらこれも總體的に見て、富の増進といふ事實は、この理屈によつては否定し難いのである。兎に角、六十年前と今日とでは、富の程度に於て、一段の進展の跡が認め得られる。

更にこれを一般的社會生活の状態に就いて見るならば、これも亦驚ろくべき向上の跡をとゞめてゐる。労働者の収入は著しく増加してゐる。嘗ては十六時間も十八時間も働らいた労働者が、今日では十時間とか八時間とかに労働時間を短縮せられ、且つ休日も多くなつてゐる。今日の労働者の身姿を見ても、六十年前と今日とでは隔世の感がある。それに労働者の知見も人格も非常に進んで來てゐる。小僧とか女中とかいふものについて見ても、六十年前と今日とでは、まるで變つてしまつてゐる。その働らく時間に對しても、主人の方で十分考へてやらなければならぬ状態となつて、昔の如く無制限なる驅使は許さなくなつた。

一般民衆が持つところの娛樂その他の機關について見ても、博覽會、展覽會、博物館、動植物園、圖書館、劇場、活動寫眞、ラヂオなど、昔の人々は何等これ等に依りて啓發されることもなく、又、享樂するところもなかつたも

のが、今日では上流下流の差別なくこれを利用し、又これを楽しむことが出来る。而して、嘗ては人間の娛樂の對象たりし、飲酒、かけ事、鬪犬、といったやうなことは、非文明的であるとして卑しめられるやうになつて來てゐる。文明開化の誇りといふことを云ふが、斯うした生活上の文化機關、娛樂機關に依りて、人間がその文明開化を享樂してゐる事實は、過去と今日とに於て非常な隔たりのあることを認めるのである。

宗教家はよく、今日の人間は信仰が衰へたといひ、信仰の衰へたのは、人間の墮落でもあるかのやうに云ふけれども、宗教が若しこの日進開化の文明と共に進んで、日進開化の人心を指導することなく、自らは百年不變の經典を擁し、昔ながらの殿堂寺院の中から、現代人を教化せんとするが如きことを思ふならば、それこそ宗教及宗教家の墮落であつて、決して民衆の墮落ではないのである。文明の進歩と共に、信仰も進化せざるを得ない。現代人が寺院教會から離れ去らんとするのは、信仰心が衰へたからではなくして、信仰心が進化向上してゐるからである。より高くより切なる信仰を求めんとするからである。現代人は神を見捨て、信仰を失つてゐるのではない。現代人は從來の宗教によりては、神を認たり信仰を發したりすることが出来ないと思ふだけのことである。

如何なる方面から、今日の社會を見ても、六十年前と今日とでは、その文化の程度が違つてゐる。國民全體として見る時に、日本人は確かに向上して來てゐる。一般普通教育の普及そのものだけでも、國民の質が變つて來てゐることとは、これを認めなければならぬ。なるほど一面には、不良少年少女が現はれたり、殺人強盜が行はれたり、幾多の非事非行が行はれてはゐる。けれども、社會生活が複雑になり、人口が殖えて行くに従つて、非事非行の増加するのは自然の數である。此の世の中を天國か極樂の如くせんとするの理想から見れば、これはまことに嘆かばしいことではあるけれども、文明を追ひ文化を求める人間の全般的的生活の上から見る時は、全般的に向上しつゝある文化の傾

向に於て、或る宥恕點を發見しなければならぬ。われ／＼人間にとりて、最も悲しみ且つ憂へなければならぬことは、非事非行の増加といふことよりも、國民全般の文化が退歩してゐるか進歩してゐるかといふ問題である。國民文化の退歩は、これ國民の没落の前兆であるからである。

この見地からして過去六十年の日本の文化を見る時は、日本の文化なるものは、あらゆる非事非行廢退墮落をも積載しながらも、國民全體としては、今日の文化にまで向上して來たものであるといふことを認めなければならぬ。而して、今後の國民文化の第一の問題としては、これに伴ふ非事非行廢退墮落の撲滅といったやうな消極的方法よりも、矢張り積極的に國民文化をどこまでも發展せしめて、その文化の向上に依る健實なる國民の自省と反省とによりて、自然的に非事非行廢退墮落の消滅を期すべきであると思ふのである。

五

それならば、如何なる國民が最も健實なる國民であるかと云へば、それは、人間各自の理性によりて、社會共同の生活に背かずして、自己の個性を活かして行く個人々々の總體を指すのである。絶對的なる個人主義的な考への下に、自分の思ふがまゝに活きんとすれば、そこには他人の自由意志に背く幾多の事柄が起つて來る。故にこゝに或程度の自制と讓歩とを必要とするばかりでなく、又、或程度の寛容を必要とするのである。人はよく斯うした態度を煮え切らないといふが、煮え切ると切らないとは、その人の個性が確立してゐるか否かに原因するものであつて、決して自制と寛容とかに原因するものではない。いや／＼ながら我慢するといつたやうなことは、これは最も卑怯なことで、決して社會共同生活に對する秩序のための自制ではない。我慢するといふことは、自分ではつきりとそれを知つて、

喜んで、満足な心を以て我慢することであらねばならない。これはなか／＼むづかしいことのあるが、永い間の國民的修練は、存外それがうまく行くものである。この態度は一見佛敎のさとり如くにも見えるが、決してさうした七面倒臭い意味から云つてゐるのではない。

ドイツといふ國は、ヨーロッパに於て最も遅れて、國際社會に頭を持上げた國である。その新ドイツの勃興を顧みてみると、日本が浦賀沖の砲聲に目を覺ましたのと相前後してゐる。しかも、ドイツは過去六十年の間に於て、世界を對手として四年間も戦ふだけの實力を養成した。その戦争には敗れたけれども、兎に角あれだけの抵抗力を保持し、且つ外敵をして足一歩も自國の領土を踏ましめなかつたといふことは、一つの大きな驚異であらねばならぬ。又、世界大戰後、ドイツは疲弊困憊の極に達して、殆んど亡國を豫想せしめられたほどであつたが、戦後七八年の日月の間に經驗したる結果から見れば、ドイツ民族なるものゝ恐るべき生存力を痛感せずにはゐられないのである。

ドイツは今日もなほ依然として困つてゐる。困つてゐるとは云ひながらも、ドイツ及びドイツ人がなしつゝあるところを見れば、日一日と復興に向つて進出しつゝあるのである。ヴェルサイユ條約は、ドイツから凡そ得られるだけの一切のものを奪ひ去らんとした。金も、船も、汽車も、牛も、羊も、豚も、飛行機も、工業製品も、藥品も、奪ひ得るものは悉くこれを奪はんとした。それがために、戦前五百萬トンと稱して世界の大商船國たりしものが、忽ちにして三十萬トンにも足らざるボロ船ばかりを持つやうになり、汽車はガタ車ばかり残されて物の役にも立たないやうになつた。國民は祖國のためカイゼルのためとあつて、最後の一錢までも抛け出して戦争に熱中したために、戦争終了のその時には全く着のみ着のまゝの赤裸の状態であつた。工場は材料なく資本なく、これがために頽廢を餘儀なくされた。實際大戰直後のドイツを見たものは、「戦敗國」の悲哀を眼前に直感したことであつた。子供は餓ゑ且つ病み、

國民は瘦せ且つ衰へた。食料を得ることの困難は職業を得ることの困難と比例した。人心は荒れて、道徳は地に墜ちた。

一一

そのドイツの現状はどうであるか。道路や鐵道は修繕され、工場はその數に於て戦前よりも殖え、且つ活動してゐる。三十萬トンに足らざりし商船隊は、今日は既に三百萬トンを算してゐる。國民は健康を恢復して、勞働能力は著しく増加した。ドーズ案に依る賠償支拂も相當の成績を挙げつゝある。外に向つては、ドイツの窮狀が宣傳されつゝあるけれども、窮乏はたゞ單にドイツばかりでなく、交戦國すべての窮乏である。ヨーロッパの經濟は、獨り一國の經濟のみの好況を豫期することが出来ない状態にある。ドイツは困憊の中にも、既に生氣を帯びて、再びヨーロッパに列強と對等の地位を恢復しつゝある。この驚ろくべきドイツの彈力は、果して何に原因してゐるのであるか。それは、一にドイツ民族の共存共榮に對する理解に基づくものである。このことに關して、今少しく考察して見たいと思ふ。

六

一九一四年ドイツが戦端を開始するに方つて、ドイツ政府は、ドイツ議會に對し、戰爭に要する莫大なる軍事豫算を提出して、これが協賛を求めたのである。その時、ドイツ社會黨は、多年主義として強く標榜し來つた非戰論を抛棄して、この軍事豫算に協賛を與へ、以てドイツ民族の舉國一致を示した。世界の社會主義者は、これを望見して、ドイツ社會黨の背反を難じ、墮落を罵倒した。しかし、ドイツの勞働者を背景とするドイツ社會黨は、この世界の社會主義者の非難攻撃に對して耳を藉さなかつた。

ドイツの勞働者は、その主義主張において極めて明確であり、且つこれに對して極めて忠實である。しかし、彼等はドイツ民族なるものに對しても忠實なのである。彼等はドイツ民族なるものゝ共存共榮なるものが、人類の共同生活圏内における第一義諦の出發點であると考へてゐるのである。彼等の主義主張の實現は、民族的生存力の優越によりてのみ意義ありとするのである。彼等は萬物無差別の見地に立ち、人類平等の立場に立つ前に、人類の一分子としてドイツ民族の健在を根柢として立たんとするのである。ドイツ民族は、ドイツ文化を以て世界に雄飛せんとする。ドイツの勞働者も亦このドイツ文化の向上發展のために、ドイツ民族の協力一致を必然のことであると信じ、内政上の問題と、國際的問題との間に、ハッキリと區別を立て、國際的問題となれば、平素敵として争うて來たところの、資本家階級との提携も辭せないのである。要するに、ドイツ人は、主義の前に殉死せんとするよりも、ドイツ民族文化の前に殉死せんとする念がより強いのである。

それならば、斯うした自己民族に對する愛着の力は、どこから生れて來たのであらうか。人の知るが如く、ドイツはその過去に於て甚だ辛き經驗を紙めてゐる。常に四隣の強國から侵入壓迫を受け續けて來た國である。その最も悲惨なのはナポレオンの鐵蹄の蹂躪であつた。このナポレオンの侵入が、ドイツ人に對して強く國民的、民族的觀念を喚起し、而して、自ら衛り自ら克たねばならぬといふ思想が國民の間に起つて來た。その時に方つて、シャルンホルストは、國歩艱難の場合に、國民が生命と財産とを犠牲にしても、自己の祖國と、自己の子孫とを擁護するは、國民の義務であるとして、強制徵兵制度を布いた。一方には、スタインとか、ハーデンベルグとかいふ名相が現はれて、義務の觀念に基づく政策を實現するために、地方自治制度を發達せしめた。地方自治制度に着目した所以は、國民が國民としての義務の觀念を養成するには、膨大な國家といふものを基礎としては、甚だ膨大に失して空想のやうなものに過ぎないから、國民をして、先づ自分が家庭に對し、生れた土地に對する公共心及び義務心を自覺せしめ、それ

が更らに擴大して一郡に及び一縣に及び一國に及ぼさしめんとしたのである。スタインヤ、ハーデンベルグのこの自治制度確立の努力は、ドイツ人をして、その家庭及び生れ故郷に對する眞摯なる義務の觀念と、忠實なる奉仕の觀念とを養成せしむるに充分であつた。かゝる間に、愛國の權化たるフイヒテが現はれて、國民の國家に對する義務の觀念を高調したのである。

一體イギリスとかフランスとか云ふ先進文明國に於ては、ロツクヤ、ホツプスヤ、モンテスキューヤ、ヴォルテールヤ、ルツソーなどの思想に依りて、新時代の展開を見たのであつたが、これよりも遅れて擡頭しかけて來たドイツに於ては、カントが思想的指導者として現はれたのである。ロツクヤやホツプスヤやヴォルテールヤ、これ等の先進國の思想家は、悉く權利の思想を主張し、自由平等への先驅者となつて、イギリスに於ては内亂を醸成し、フランスに於ては大革命を誘發したのである。ところがドイツに於ては、カントが義務の思想を説いて、人間の道徳律を以て、人間の意志の格率が、同時に普遍律たり得る如く行動することゝなしたそれが、極めて深酷なる意味を以てドイツ民族の間に普及するに到つた。これがシャルンホルストヤ、スタインヤ、ハーデンベルグヤ、フイヒテヤ、その他の政治家、軍人、教育家、學者などによつて、愈々益々國民的に宣傳せられたので、これが全くドイツ民族の一特性を築き上げるやうになつた。

即ち、ドイツ人なるものは、自己のなすべきことに對しては、極めて眞面目なる責任觀念を有し、自己の義務は必ずこれを果すといふ忠實なる觀念を抱持してゐる。先づ以て一身を修め、次に一家を修め、次に郷土を修め、次に一郡一州を修め、更に國家を修めんとする、極めて秩序的なる觀念を持つてゐる。小よりはじめて大に及ぶといふのがそれである。

こゝで、ドイツの労働者が、先づ以てドイツ文化の完成を期せんとする努力の意味がはつきり了解することが出来ると思ふ。ドイツの労働者と雖も、世界中の労働者の自由解放、安寧幸福を希望し、その理想に向つて努力してはゐる。世界の労働者の結合の必要なることも知つてゐる。けれども、世界の労働者の結合は、漫然たる結合であつてはならぬことも知つてゐる。そこで、先づ以てせめてドイツの労働者が修練されたる文化の持主として、一個の完全な人格として成功しなければならぬと考へてゐる。即ち、世界の労働者は、先づ以て、今日各自が現實に生存してゐる生存圏内に於て完成しなければならぬとするのである。労働者としての人格、労働國としての文化、それが完成しないものが結合しても無意味だといふのである。ドイツの労働者が、ドイツ民族としての文化の向上に向つて、努力する心事を洗えば、實に斯うした、民族的愛着心に根ざしてゐるのである。

七

それならば、ドイツ人は如何にして、斯くも自己民族の共同生存に對するハツキリした反省力を持つことが出来たかといへば、それは普通教育の普及に因るものである。ドイツは、その普通教育の行き渡つて居ること、及びその教育の極めて實務的であり、現實的であることを以て有名である。その教育は、要するに、如何にして生存すべきか、何によりて生きべきか、何のために労働するかといふ三點を、明確に國民に自覺せしむると同時に、各個人に立派に生きるための實力、即ち技能を與へるのである。かく生活そのものに對して、實際的に反省自覺せしむることに成功してゐるドイツの普通教育が、國民一般をして總體的に、人間としての向上を遂げしめてゐることは、争はれぬことである。即ち、ドイツのこの實情は、われ／＼をして、一國の文化なるものゝ高下の定まるところは、その國に於て一部者流の優越したる人士の輩出を見ることではなくして、國民全體が總體的に進歩向上することであるといふことを

思はしめるのである。一人や二人の天才を生み出して、それによりて、決してその國、その民族の文化が進んでゐるとは云へないのである。

ロシアは一九一七年に於て千古未曾有の大革命を経験した。その革命を成し遂げた人士の中には、確かに類まれなる人傑も存在してゐる。その革命の思想の中にも、或點に於ては、確かに一歩時代に先んじた點のあることも認め得られる。しかし、これによりて、ロシア民族文化が世界に一歩を先んじてゐるとは云はれないのである。ロシアの文化は今日決して、世界の前に誇り得られるものではない。といふのは、ロシアの全人口の六割は全く無知無學の、半未開の徒である。これ等の半未開の徒の組織してゐる社會が、世界に進歩したる社會であるとは、何人も肯定することが出来ないのである。

ロシア革命が成功して、政權がボルシェヴィキの手に移つた時、新革命政府は、先づ以てロシアの勞農者に向つて、新政府は、ロシアに普及せしむるに、世界に於て最も進歩したる文化生活を以てするのであるといつた。そして、文化生活の第一歩は電化政策である。電力の利用は、最も進歩したる人間のなすところである。新政府は先づこれを全ロシアに普及せしめやう。といつて、電氣のある都會の隣接村落に向つて、電線を一本づゝ引つ張つて電燈を點じてやつた。これまでランプやロソクで生活してゐた農民たちは、これを見て、なるほど新政府は、帝政時代の政府と違つて、百姓の便宜をはかつてくれるとして喜んだ。けれども、これは都會の隣接の村落にだけやつたもので、その後二年たつても、三年たつても、それ以上遠い村落には及ばなかつたのである。

勞農政府はまた勞働者や農民に向つて云つた。最も進歩したる文化生活を實現するには、ロシアの如き大國としては、とても汽車の如きまのろいものではないかぬ。これはどうしても、文明の最高利機たる飛行機によりて、ロシア内地の

距離を縮少しなければならぬ、と。そこで、モスコフ——リガ、モスコフ——オムスク、モスコフ——オデッサなどの航空路を開いて、一週に一度か二度位づゝ飛行機を飛ばした。空を飛び行く飛行機は、下界のどこからでも見える。これを見た百姓たちは、いよゝゝ文化の生活がはじまつた、やがてはあの飛行機がわれゝの村にも着陸して、われゝを一日にして百里の遠きを往復せしめてくれるであらう、と喜び勇んでゐたのである。けれども、その飛行機も、二年たつても三年たつても、彼等の村には着陸せず、常に頭上を過ぎ去るばかりであつた。

その他大農耕作法とか、國民教育とか、色々とならぬ企てを天下に宣言したけれども、すべてはその効能書のやうに發展はせず、反つて、國民の生活は窮迫し、饑饉が起り、農民は不平に堪へずして、處々に一揆を起すやうになつた。つまり云へば、彼等は宣傳に欺かれたことを知つて、非常に憤つたのである。その不平の向ふところは、遂に勞農政府をして、新經濟政策を執らねばならぬやうにせしめたのである。ロシア人の大部分は無知無學であるがために、これを利を以て誘ふに於ては、如何なることをも辭せないものであるが、忽ちにしてまた反對の行動をもとるに到るのである。無知の徒のたのみ難いのは獨りロシアの農民ばかりではない。

これに反して、教養あるドイツ人は、あの困苦の絶頂に達し、ロシアからの宣傳の盛んなりし時代に於ても、なほ且つ隱忍自重して、國民全體が一致協力し、國家の復興のために努力して、とうゝあの難局を切り抜けたのである。彼等は決して宣傳に乗ることなく、自らよく事理を辨別して、利によりて迷はざるゝところなく、各自、自己の本務を盡すことを怠らないのである。こゝに民族の共同生活の強味がある。これをロシアの農民の、利慾によりて動搖するのと比較する時は、その健實不健實の程は十分に察知せられるのである。ロシアの社會は、自分を以て云はしむれば、今日なほ決して健實なものとは云へないのである。眞に健實なる社會なるものは、これを構成する人間各自の理

性的辨別力の有無によるものであると考へるのである。この意味からすれば、ドイツの社會なるものは、確かにロシアよりも數等上なる健實性を持つてゐるものと云ふべきである。

八

理想としては、如何なることでも云へる。然し乍ら、現實の生活に處して見ると、さう理想的には行かない。レーニンもロシア國民の無知を嘆じて、「まさか、かうまでとは思はなかつた」と云ひ、更に、「ロシア共産黨は今後最も戒むべきことは、黨員の自惚れと、黨員の墮落と、國民の無知とである」と警戒してゐる。如何に立派な主義理想を抱いて國政に臨んでも、國民にして無知無理解であるならば、何等その成績を擧げることが出来ない。政治は國民の素質をよく知つて、これに最も適應するの策を樹て、國民に依つてその運用の効果を擧ぐるにあらざれば、民衆政治の實は擧らないのである。國民生活の向上發展も同様であつて、要は國民の素質如何にかゝつてゐる。國家民族が榮えるといふことは、これを構成する各個人全體の質の向上に外ならない。

ドイツの強味は國民の教養そのものであり、ロシアの弱點は國民の無知そのものである。この二つの好對象を見る時に於て、われ等の反省一番せざるべからざるところのものは、日本民族の生活文化の向上發展のためには、日本全體にわたつて、個人々々の教養をより高く、より深く、より眞摯にやらなければならぬといふことである。日本は過去六十年の間に於て、著しい進歩を遂げたのであるが、今日の生活状態を見ると、そこには幾多の缺點があり弱點がある。これを匡救してより高き文化生活を實現せんがためには、國民の心を一にして、その教養を高めなければならぬ。

ドイツといふ國は、どうして、都鄙の差別なく、教育文化が普及したかといふことを考へて見るに、ドイツは元來

今日の如く統一された一國ではなく、プロイセンとか、バイエルンとかザクセンとか云つた風に、十幾つかの邦に分れてゐたものである。その邦々は小さいながらもお互ひに一邦の面目を保持し、そこには人材が現はれて、自邦の向上進歩に努めた。斯ういふ地方的觀念が、スタイン以來の自治觀念と結びついて、何でも自己の生れ故郷第一の觀念が養はれ、愛郷の心が起つて來た。それであるから、ドイツの地圖を擴げて、全國にわたつて分布されてゐる人材を探して見ると、實に驚ろくべき多數に上るのである。

日本では、人物でも事業でも、悉く都市集中の姿で、所謂中央集權的である。故に地方青年の上京熱とかいふやうな、都をあとがれる思想が高まつて來る。それで、人材はだん／＼に地方に乏しくなつて、地方はこれがためにその指導者を失ふといふ風である。日本に於ける人物分布の跡を見ると、その餘りに中央に偏つて居るのに驚ろかされるのである。地方文化を高めるには、どうしても地方に人物が散布せられなければならない。ドイツの地方青年が、さして上京熱の高められないのは、その生れた地方に誇るべき人物があり、教育機關があり、その他あらゆる機關があるからである。地方によりき機關が出來るといふことは、その地方によりき人物が居住することを意味する。地方開發に必要なのは、中央政府の政策にあらずして、地方に人物が居住して地方民を指導し、また事業をなすことなのである。それが、その地方生へぬきの人物であるならばなほ更ら効果がある。

人間の教養といふものは、學校の教室においてのみなされるべきものではない。その生活環境における人々からの刺戟に俟つところより大なるものがある。その環境に大なる人物があれば、その人物の感化がよく及ぶものである。それが必らずしも、現在生きて居る人でなくとも、過去に於ける偉人物でも、その郷黨に與へる感化は大なるものである。偉人崇拜の意義はこゝから生れて來るのである。この意味からも、「故郷に還れ」といふ語は、殊に、今日の日

本に於て、深い意義のあるものであることを思ふのである。

日本今日の生活文化を高めるには、どうしても、地方々々の人々が、先づ以てその地方々々に於て、その文化の向上を期することである。村なら村、町なら町、斯うしたものは國家から見れば、一つ一つの細胞體である。その一つ一つの細胞體が、個々に健實になることは、やがて國家といふ全體が健實になることに外ならない。理想は高きを見つめるが、現實の生活は極めて卑近なものである。われ等は高き理想を望見しつゝ、まづ以て己れを修め、己が故郷を修め、斯くして個人としての本務と國民としての本務とを全うする時に於て、國家は知らぬ間に向上しつゝあることを知らねばならない。世界大戦中、ベルギーの一老農夫は、砲聲を聞きながら、熱心に畑を耕してゐた。村の若い男たちは、この國家危急の場合に、何をぐづぐづして畑などを耕してゐるかと思つた。ところが、その農夫は、「おれは鐵砲打つことも知らぬ、戦するすべも知らぬ、しかし、どうかして國のためにつくしたいと思ふので、斯うして日夜働らいてゐるのだ、戰場に行くばかりがベルギー國民の忠義ではない」といつたといふ話は、非常に有名な話であるが、國民各人が自己の本務を忠實に果たすといふこと、それが最も大なる社會的奉仕であることを知るべきである。世の中はだん／＼セチ辛くなつて來てゐる。悲觀すべきことも樂觀すべきことも多々ある。けれども、眞實に生きる人には悲觀も樂觀もあらう筈がない。眞實に生きる人には、悲觀するほどの餘裕も、樂觀するほどの閑暇もないわけである。悲觀したり樂觀したりするのは、それだけ心に間隙があり、閑暇があり餘裕があるのである。われ等は心を一にして、お互ひの文化の向上のために、國民の素質をよりよくし、より高めるために、各人個々の努力を致さねばならぬ。先づ以て己れの質を高め、更に己れの周囲の質を高め、進んで一郡一縣一國に及ぼすの心がけが大切である。國民の素質の向上は、やがて國家文明の向上となるからである。

學藝講演通信の旨趣
學藝講演の邊化と公正なる輿論の蒐集
◇ 現代理論の通信 ◇

規定
体裁 菊版二十頁内外にして
頒布方法 毎月三回發刊す、
會員組織とし、會員の
みに頼ち、絶対に分冊
販賣せず、
申込書に記名捺印し、
一ヶ年分の會費前納と
す、
特別賛助員は一ヶ年金
五十圓とし、普通會員
は一ヶ年六圓とす、
本社主催の講演會に、
會員は無料入場する事
を得ると共に、會員は
其主催に係る講演會の
交渉を本社に依頼する
ことを得。

印刷 大正十五年五月五日
發行 大正十五年五月十日

トットパン通信講演藝學

世・信・莉・手・嘉
編輯兼印刷 發行

東京市神田區表猿樂町十九

印刷部 通信講演藝學

東京市神田區表猿樂町二十二

通信講演藝學 發行所

電話神田(25)二八八四番 振替東京二五一〇番

支局 沼津市上本通三一二電六五〇 名倉三郎

静岡縣下田町 清田賢治郎

〔會員組織〕 毎月三回發行 會費一ヶ年金六圓

終

